

《特別寄稿》

ケニア遊牧民の潜在的農耕

— トゥルカナの事例 —

伊 谷 純一郎*

1. はじめに

この小論は、ケニア北西部の極限的な農耕の事例をまとめたものである。もともと遊牧民トゥルカナ (Turkana) の主生業である牧畜が調査の主眼であったから、彼らにとっては副次的な生業にすぎない農耕については断片的な記載を得たにすぎない。タイトルを敢えて潜在的農耕としたのは、自然条件が許さなくとも、人々の知識や経験や文化の中には、農耕に対する構えが生きていて、それがいつでも芽を吹こうとしていることを意味している。年によっては農耕は眠っているか、あるいは収穫に至るまでの過程で放棄の止むなきに至る。しかし別の年には、何がしかの収穫を得ることができるであろう。

トゥルカナは、ウガンダ西部のドドス (Dodoth), ジエ (Jie), カラモジョン (Karamojong), テソ (Teso), スーダン南部のトポサ (Toposa), ジイエ (Jiye) などの諸部族とともにセントラル・パラ=ナイル (Central Para-Nile) 語を話す人々の一部族とされており、トゥルカナ以外はいずれも半農半牧の生活を営んでいる。彼らは主として大地溝帯の西のプラトーの上にテリトリーをもち、降雨に恵まれ、農耕と牧畜の両方に身を委ねることができるのだが、暑く乾いた地溝の底の平原をテリトリーとするトゥルカナにはそれができないのである。

もともとパラ=ナイル系の人々は、農耕、狩猟、採集、牧畜とあらゆる生業

*いたに じゅんいちろう, 神戸学院大学人文学部

を営み、複雑な民族移動の過去をもって今日に至ったと言われている〔長島1972〕。たしかにトゥルカナの農耕には、民族の記憶の痕跡といったおもむきが強い。それは、消え去ろうとしてなお執着が命脈を保たせている文化と呼んだ方がよいように思う。従って、極限的だとは言っても、農耕の発生といった問題とはおそらく関係がないであろう。

調査は、1976年に予備調査としてトゥルカナランド (Turkana-land) の東南外縁を広く歩き、1978年の7月から10月にかけて第1回の調査を〔伊谷1980〕、1980年の8月から9月にかけて第2回の調査を〔伊谷1982〕、1982年の第3回の調査は7月から8月にかけておこなった。

2. トゥルカナランドへのアプローチと調査地

ケニアの首都ナイロビ (Nairobi) から、ケニア北西部のトゥルカナランドに行くのには、北西に向かって大地溝帯の底に下り、北上してナイバシャ (Naivasha)、ナクル (Nakuru) を経由し、バリング (Baringo) 湖に向かって北上する。ナイロビからこのあたり一帯にかけては、かつてのホワイト・ハイランドの中心で、ケニアの穀倉地帯であり、国営農場などの大農式の広い農場が連なっている。

マリガット (Marigat) からバリング湖西岸まで来ると、農耕地は影をひそめ、アカシアの樹林になる。さらに北に向かって走り、ギニヤング (Nginyang) のあたりに達すると、*Acacia mellifera* がドミナントになり、乾燥帯の植物が目立つようになる。槍を携えて牛群を追うポコット (Pokot) の姿を散見するようになるのはこのあたりからである。

北西に進路をとり、海拔約1,800mのキト・パス (Kito Pass) を越えるのだが、その灌木林の中にトウジンビエの小さな畑が開かれているのを見た。キト・パスの西は、半砂漠の平原で、遊牧ポコットのホームステッドが散在する。ケリオ (Kerio) 川の上流を左岸に渡り、チェランガニ (Cherangani) 山塊の東麓を北上する。この山麓は水と緑に恵まれ、古くから灌漑農法なども発達した

と言われる地域で、チェランガニの山腹には農耕ポコットとマラクウェット (Marakwet) の集落と耕地が連なり、トット (Tot), チェセゴン (Chesegon), ロムット (Lomut), シゴール (Sigor) などの集落では、定期的に市が開かれ、農耕民と牧畜民の交易の場となっている [Tanno 1980; Kurita 1982]。

シゴールから北上すると、景観は半砂漠となり、トゥルクウェル (Turkwel) 川の右岸は裸出した大地と疎開したアカシアが果てしなく続く原野、トゥルカナランドに入る。河床を掘った水場に集まる駱駝・山羊・羊の群れと、それを追うトゥルカナの牧童を見る。ロキチャ (Lokichar) を経、トゥルクウェルの架橋を渡り、砂の中の町ロドワ (Lodwar) に着く。

私たちの調査地は、ロドワから北西約130kmのカクマ (Kakuma) のさらに北方8kmの地点である。ロドワとカクマの間も典型的な半砂漠の景観が続く。乾いていて暑く、人跡は稀で、農耕とは全く無縁の地に来たという印象が強い。カクマはこの乾いた大地を北流するタラッチ (Tarac) 川の右岸にある小さな町で、ロドワからはロキチョキオ (Lokichokio) を経てスーダン領に通ずる道路の中間に位置する。役場とカソリックの教会と病院と学校のほかに、ソマリ (Somali) 族の商店がかたまっている。町の一步外は、ここを訪れまた去ってゆくトゥルカナと畜群の世界である。

私は、1978年に太田至氏とともにこの町の北方にキャンプを定めて生態人類学的な調査を開始した。トゥルカナの一つの父系大家族に寄宿した形で、キャンプを中心に、タラッチ川流域、北はスーダン国境に近いロティキピ (Lotikipi) 平原、西はロキチョキオ、オロポイ (Oropoi), ロレン (Loreng), ガリテイ (Garitei) を結ぶウガンダの国境に沿ったプラトーの東麓、東はトゥルカナ (Turkana) 湖西岸の北半に及んだ。この調査を通じて得られたトゥルカナの農耕の稀薄な痕跡を、調査記録の中に辿ってみたい。

3. 自然環境と人口

トゥルカナランドの植物景観は、地形その他の条件により多様であるが、類

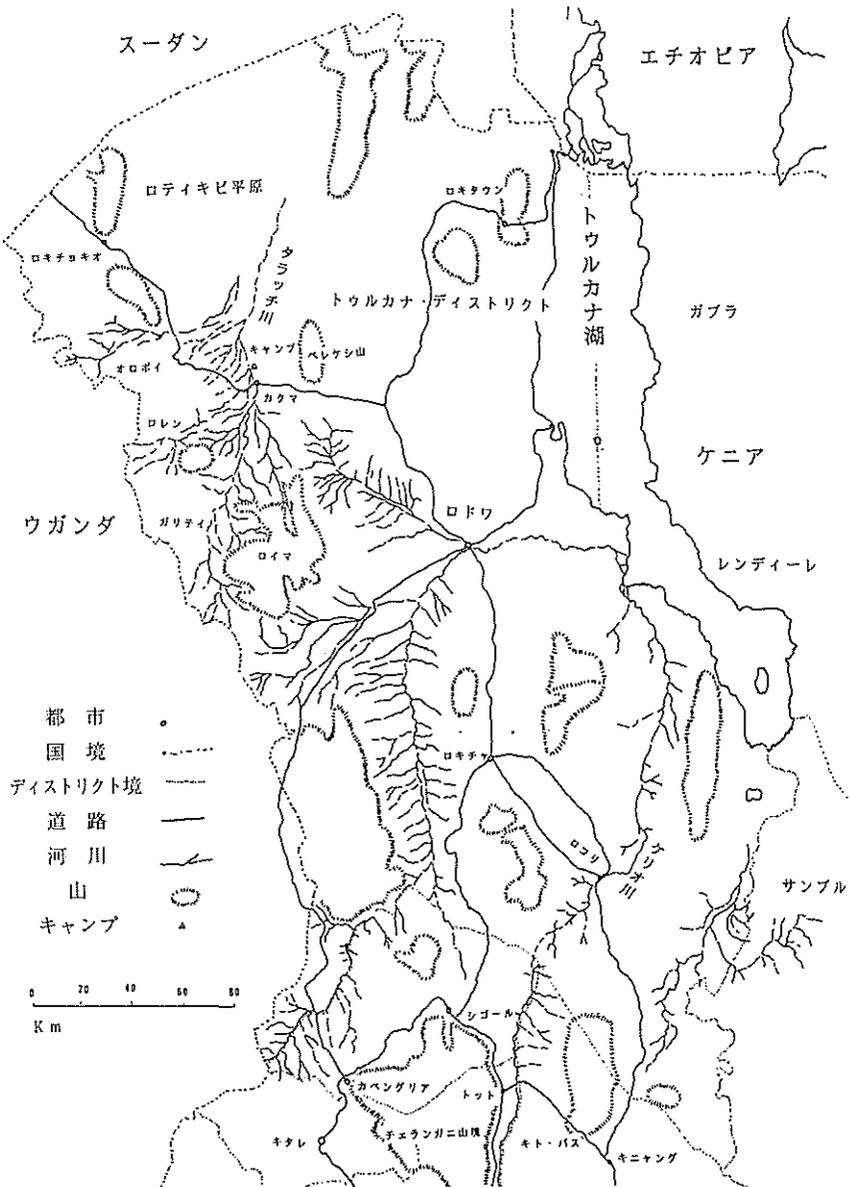


図 トウルカナ・ディストリクトと周辺。



写真1 タラッチ川の河床と河辺林。

型的には半砂漠 (semi-desert) と呼んでよいと思う。SOPER [1985] によれば、年間降雨量は地域によって差があるが、湖岸と中央部に広がる平原では180mm、北東部で380mm、南部のトゥルクウェル川流域で360mmとなっている。ウガンダ国境沿いの地域では520mm、南西部の山岳地帯では750mm以上という推定値があるが、正確な計測値はないという。しかしトゥルカナの生活の場の中心は低地であり、平均雨量は300mm以下と考えてよいと思うが、降雨は4月から8月の間に集中している。ウガンダ国境に源を發し北流する大河タラッチも、年に数回、上流で降った雨が赤い鉄砲水となって通り過ぎるだけで、通常は水を留めていない。

地表は、砂、コーツやチャートの礫、溶岩などが露出し、草木で覆われていない所が多い。河辺には *Acacia tortilis* の高木と、*Salvadora persica*, *Commiphora africana*, *Balanites* sp., *Grewia* sp., *Cadaba rotundifolia*, *Calotropis procera* 等の灌木林が見られるが、河辺林の外は裸出した地表に点在する多肉

植物などのパッチ状の叢生を見るにすぎない。

北方のロティキピ平原は、タラッチ川の氾濫原となっており、土壌は黒色綿花土でマメ科やキツネノマゴ科などの矮性灌木が地表を覆い、トゥルカナにとって雨季の有力な牧野となる。トゥルカナの牛の遊牧は、ロティキピ平原を一つの極として、南方約150～200kmのウガンダ領ジェランド (Jie-land) までの間を年周期的に行き来する。ジェランドはエスカープメントの上にひろがっているために牧草に恵まれており、また国境付近の山地にはより密な植生が見られる。

トゥルカナ・ディストリクト (Turkana District) の面積は60,824km²で、1979年の統計では人口は142,702人という数値が示されている [SOPER 1985]。ディストリクトの首都ロドワと北東の町ロキタウン (Lokitaung)、さらに近年ではトゥルカナ湖畔で漁業に従事する人口が増えているから、内陸の人口密度はSOPER [1985] も指摘するように1 km²当たり1人以下と考えてよいであろう。しかし、私が歩いた原野で家畜が歩いた跡のない所は皆無だったと言ってよかった。

なお、トゥルカナの人口の一部は、南東のサンプル・ディストリクト (Samburu District)、トゥルカナ湖を隔ったレンディーレ (Rendille) 族やガブラ (Gabra) 族のテリトリーであるマルサビット・ディストリクト (Marsabit District) の一部にも進出していた。

4. トゥルカナの牧畜とホームステッド

トゥルカナの社会的単位は父系拡大家族であり、それは同時に家畜所有の単位でもある [GULLIVER 1951, 1955; OHTA 1980]。一つの父系拡大家族は、生態的条件を異にする山羊、羊、牛、駱駝、驢馬の五家畜を4～5のハードに分け、それぞれに管理を担当する家族成員を配し、独自の遊牧をさせている。この人間と家畜のワンセットをアウイ ('awi) と呼ぶが、この語は同時にホームステッドそのものをも指す。

アウイは二つに区分されている。その一つは父系拡大家族の家長が住むアウイで、主たるアウイ ('awi napolon') と呼ばれている。これを中心にして、牛のアウイ、駱駝のアウイ、羊のアウイなどが、それぞれの家畜にとって好ましい地域を遊牧する。これらを衛星的なアウイ ('awi abor') と呼ぶ。牛のアウイ・アーボルの年間の遊牧の軌跡は500kmに達することもあるが、アウイ・ナポロンとの連絡は、家族構成員が両アウイの間を足で歩いて保っている。

牛牧のアウイ・アーボルの分布は、トゥルカナランドの西部と北西部に偏し、中央の平野は避けている。それに対してアウイ・ナポロンは、トラッチ川の流域に点在し、牛牧のアウイ・アーボルに比べると移動の頻度も少なく移動距離も短く、半定住的と言ってもよい。私たちが調査の主対象にした父系拡大家族のアウイ・ナポロンの例をとってみても、5年間にわたって、トラッチ川右岸の約3kmの範囲内での移動を繰り返しているにすぎなかった。

駱駝のアウイ・アーボルの遊牧域は、トラッチ川沿いと牛の遊牧域との中間の丘陵地帯、広大なアカシアの疎林帯が中心になっており、移動の頻度は牛のアウイ・アーボルに次いで高いと考えられる。羊のアウイ・アーボルは、アウイ・ナポロンに近い丘の麓などに居を占め、大きな移動はしないと考えられる。驢馬は駄獣で、それぞれのアウイに必要な頭数が配備されているが、放し飼いにされており、驢馬のアウイ・アーボルをつくるということはない。

アウイ・ナポロンは山羊を主とし、若干の羊および駱駝を同時に保有している。平野の中央部というのは、河辺林はあるものの、それを一歩出ると半砂漠が広がっており、暑く乾いていて、一見もっとも苛酷な環境条件のように見える。しかし、1980年の大旱魃時には、牛牧以外のすべてのアウイ・アーボルがアウイ・ナポロンに併合されていたから、実はここがもっとも旱魃に対する耐久性をもった土地柄であり、ここにアウイ・ナポロンが居を定めていることの原因が明らかになった [伊谷 1982]。

以上のように各アウイの機動性に着目すると、牛と駱駝のアウイ・アーボルは農耕とは無縁だと考えてよい。牛牧地帯はトゥルカナランドでももっとも緑の濃い地域なのであるが、激しい移動は農耕に投ずる時間的余裕を与えないで

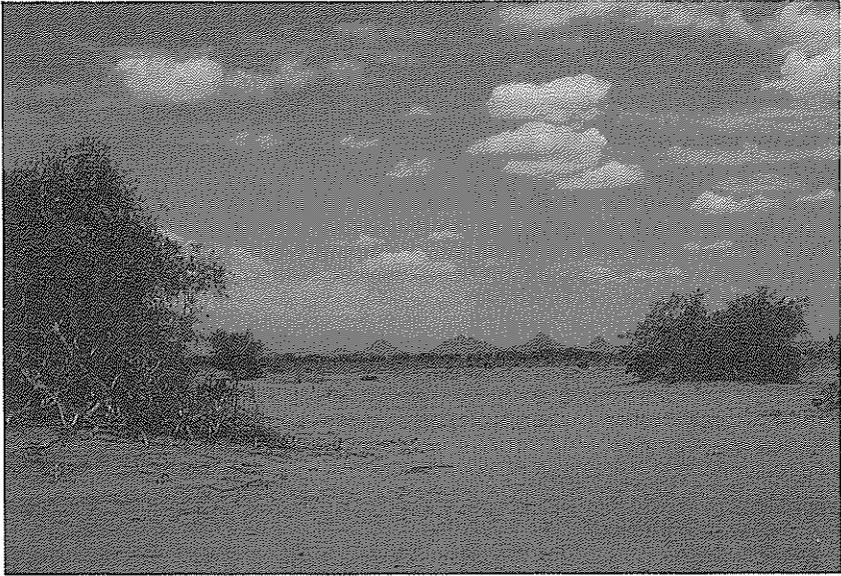


写真2 半砂漠の景観。遠景に連なるのはウガンダ国境沿いのエスカープメント。

あろうし、駱駝遊牧の中心になっているアカシアの疎林は、後述するように農耕の適地のもっとも乏しい地域でもある。

従って、定住に近く、しかも時折水をたたえることもある大河の周辺に住む人々、つまりアウイ・ナポロンの居住者だけが、農耕の機会に恵まれていると言ってよいのである。

5. 農耕地

トゥルカナランドで私たちが目撃した農地は、つぎの4類型中のいずれかであった。

(1) ウガンダ国境沿いのエスカープメントの下に拓かれた比較的大規模な農地。ロキチョキオ、オロポイ、ロレン等で見られた。このような大きな農地が存在する背景には、国境守備に駐屯する警察やキリスト教会などの存在を無視

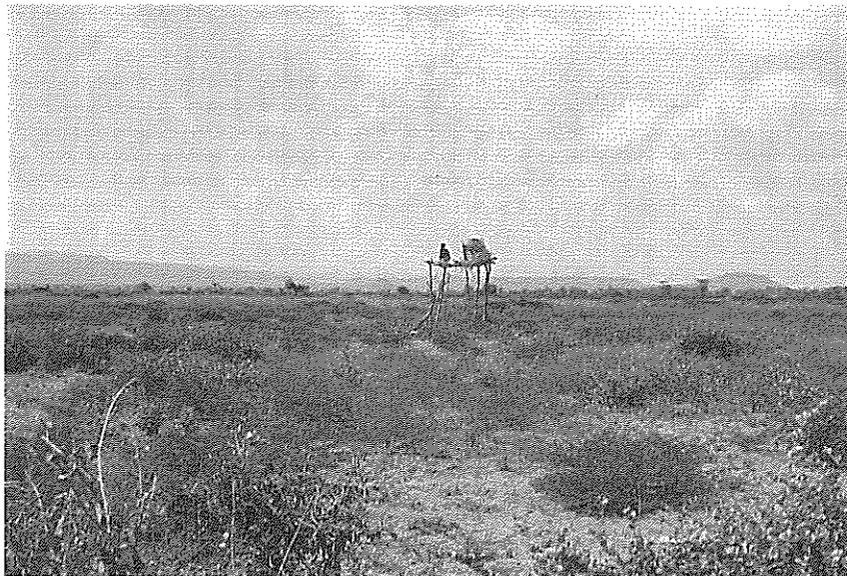


写真3 アクワガットの農地。鳥追いのための櫓‘epem’の向こうにモロコシの穂が見える。

しえないかもしれない。ロキチョキオはトボサ族との、オロボイはドドス族との、ロレンはジエ族とのテリトリーに接しており、常識的には略奪の危険にさらされている所なのである。オロボイの農地所有者の家は円筒型の土壁に円錐型の屋根をもったドドス型の家で、主人はトゥルカナだが妻はドドスだということだった。

(2) 私たちのキャンプの東北、ペレケシ (Pelekech) 山の西麓に、南北に走る主稜と前山との間に平坦な鞍部があり、中規模の農地のあとを見た。1980年の旱魃の年のことで、作付けはされておらず、この一帯は無人であった。水は全くないのだが、高度のために霧などがかかりやすく、平年にはモロコシ栽培が可能なのであろう。

(3) タラッチ右岸の河岸段丘の上の水はけの悪い平原の一部が耕地になっていた。カクマと私たちのキャンプの中間、アクワガット (Akwangat) 付近で、土盛りをしてモロコシを植えていた。タラッチ河畔ではもっとも大きな農地で



写真4 タラッチ河畔の畑とモロコシ。

あった。

(4) タラッチ川に注ぐ細い流れが、河岸段丘を浸蝕してできた1 ha内外の小さな凹地。タラッチ本流の河辺は、鉄砲水で苗が流されるおそれがあるので、農地に利用されることはない。この類型の耕地は3～4を数えた。規模は小さいが成功率は高いように思われた。

(1)は、遊牧民トゥルカナの農耕地としては典型的なものではない。(2)は、条件のよい年に作付けされる出作りの畑地で、この種のはベレケシの西麓以外では見ていない。(3)と(4)が、アウイ・ナボロンの女性たちによって、毎年作付けが試みられる耕地と見なしてよい。

GULLIVER [1951] は、聞き込みとして、トゥルクウェル川上流のスク (Suk) 山のンゲボトック (Ngebotok) に、古い時代に牧畜を放棄し農民化したトゥルカナが居住すると述べているが、私たちはここは訪ねなかった。また、トゥルクウェル川とケリオ川の河口のデルタ地帯で、湖の水位の上昇を利用した農耕

がおこなわれているとも書かれているが、近年のトゥルカナ湖の水位の異常な低下は、このような農耕を不可能にしているにちがいない。

いずれにしてもトゥルカナランドのほとんどは牧野であって、農耕地として利用されている面積は微小であり、それすらも年毎の気象条件によって大きく左右されていると言わなければならない。

6. 作物と農業生産物への依存

GULLIVER [1951] は、トゥルカナの主要作物はモロコシで、地域によってはこれが唯一の作物であるが、ヒョウタンも需要を満たすほどの収穫はないにしてもかなり普遍的な作物だと述べている。また FEDDERS ら [1977] は、モロコシのほかにヒョウタン、トウモロコシ、マメをあげているが、私たちはモロコシ以外の作物がトゥルカナランドで栽培されているのを全く見ていない。

遊牧ポコットが、海拔1,800mの山地にトウジンビエを栽培していたということはすでに述べた。トゥルカナランドでは、トウジンビエも一度も目撃していない。私たちが見た唯一の作物は、モロコシ ('emuwae' あるいは 'ngimwa') であった。

トゥルカナランドの南端からは目と鼻の農耕ポコットのテリトリー、チェランガニ山塊の山麓では、モロコシ以外に、トウモロコシ、シコクビエ、サトウキビ、インゲン、グランドナッツ、キャッサバ、サツマイモ、バナナ、カボチャ、トマト、各種野菜類、パパイヤ、オレンジ等の豊富な作物が栽培されているのであるが [TANNO 1980; KURITA 1982]、トゥルカナランドとの差はあまりにもドラスティックだと言わなければならない。

農業生産物の中で、トゥルカナにとって最も重要でかつ普遍的なものと言えば、それは食品ではなく 'etaba' と呼ばれる嗜み煙草である。彼らが栽培しているのを目にしたことがなく、GULLIVER [1951] もトゥルカナはその栽培法さえ知らないと述べているタバコの普及は、それが通貨に等しい役割を果たしていることと無関係ではない。とくに店舗もない辺境の地に行けば行くほど、

タバコは貴重なものとなり、これなしに奥地の旅を続けることはできない。行く先々でミルクを得ようとする都度、'etaba'を要求されるからである〔伊谷1980〕。

トゥルカナたちは男女を問わず幼少時から嘔み煙草 'etaba' に馴れ親しんでいる。その一つまみを嘔み、唾液を吐き、常時玉状にした 'etaba' を口腔内にたくわえている。'etaba' は、タバコの葉を揉んで乾かしたもの、あるいはそれを縄のように編んで渦巻状にしたものなどがあるが、カクマなどの町のソマリ族の店で売られている。また、路傍にかがみ込んだトゥルカナの女性が、少量ずつを売っている。'amakat' と呼ばれる塩湖から得たソーダの結晶も同様にして売られていて、人々は 'etaba' と 'amakat' を同時に嘔む。'etaba' を粉にした喫ぎ煙草は 'asiji' と呼ばれるが、これを愛用するのは一般に男性の老人である。

今日では、'etaba' のほとんどはソマリによって奥地にまで運ばれるが、GULLIVER [1951] によると、1950年当時にはドドス、ジエ、カラモジョンが供給者であったらしい。

モロコシは、トゥルカナの常食となっている唯一の農業生産物である。もちろんそれは常備されているわけではなく、よい収穫があった年にも、祭礼の多い7～8月に消費しつくされてしまう。モロコシは、一般に調味料を一切用いることなしに鍋で煮て、それを手で口に運ぶ。私は、粉にしたものを熱湯で練るといった、所謂ウガリ (ugali) にして食べるのを見ていない。1982年に、人々が収穫したモロコシの中から黒穂病にかかったものだけを選び出し、それで真っ黒の粥状のものをつくって食べているのを観察した。これは、'ethnai' と呼ばれていた。

GULLIVER [1951] は、トゥルカナは家畜をもたずモロコシ栽培だけをする人々を卑下するが、モロコシそのものを卑しんでいるわけではなく、ミルクが十分に得られ、その上にモロコシが得られることは喜ばしいことだと考えている、と述べている。私もこれと同様の印象をもった。

1980年の旱魃時には、ヨーロッパ共同体やカソリック教会によって救援物資

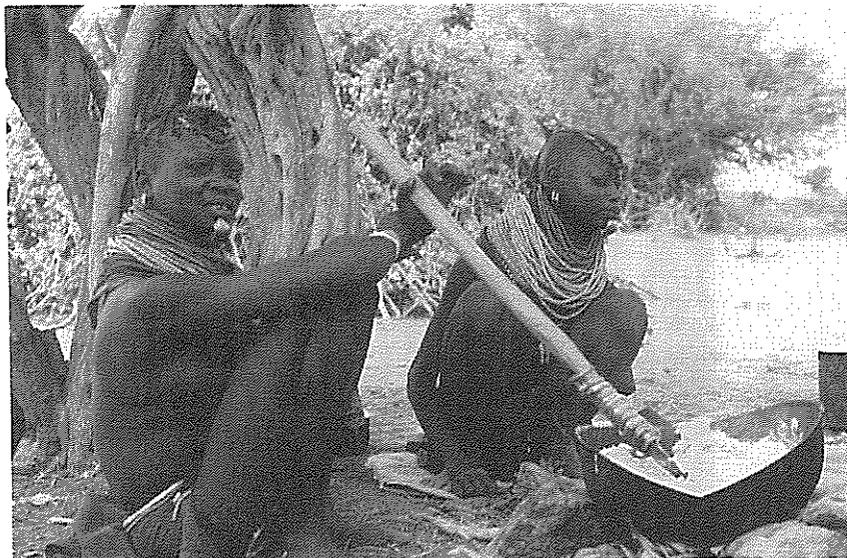


写真5 トウモロコシで酒をつくるトゥルカナの女たち。

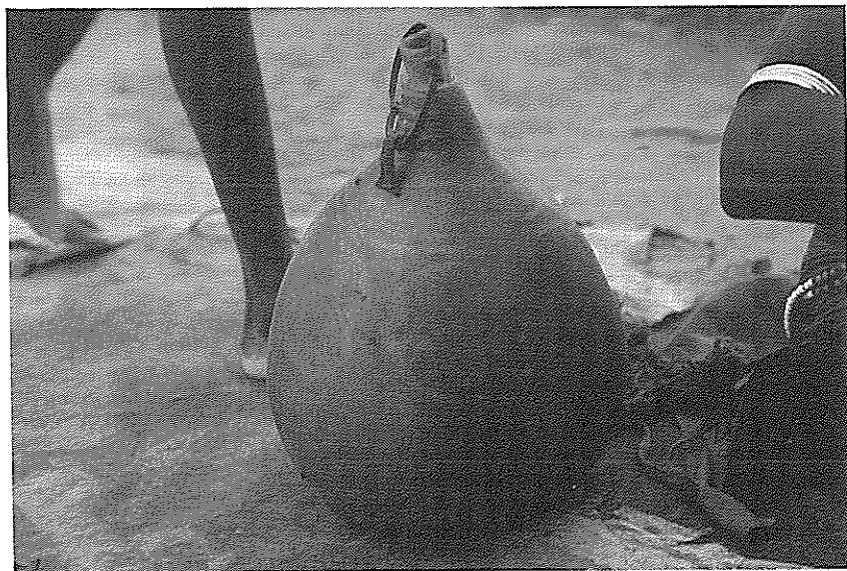


写真6 模様をほどこしたヒョウタン。

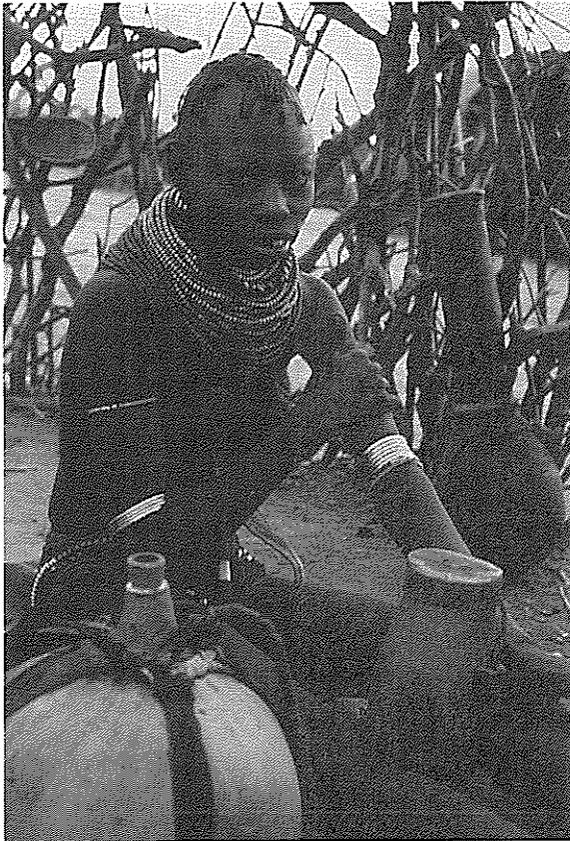


写真7 攪乳用の大型のヒョウタンと容器に用いる小型のヒョウタン。

としてトウモロコシが配給され、ミルクを断たれたトゥルカナはこれに食生活を依存していたが、これは異例の事態と言ってよかった。女たちはトウモロコシの一部を煮て、それに砂糖を加えて発酵させ、蒸留酒 'epurot' をつくっていたが、これは現金収入を目的としたものだった。

モロコシと 'etaba' 以外の農業生産物で、トゥルカナのアイで見かけた唯一のものはヒョウタンだった。これは 'etwo' と呼ばれ、丸い大型のものは駱駝の皮で補強し、皮紐をつけ、外皮に焼鋺で模様をほどこしたものもある。蓋は

切り取ったへたを逆にして口に挿し込んでいる。ヒョウタンの中にはミルクを入れて一晩寝かせ、翌朝これをゆすぶって攪乳し、酸乳と脂肪を分離する。トゥルカナランドでは、マサイ (Masai) 族が用いているような長細いヒョウタンは見かけなかった。丸いヒョウタンを縦に二つに割ったものは 'adere' と呼び、ミルクや水をすくうのに用いる。また、小型のヒョウタンは単なるミルク容器として用いていた。

このように、ヒョウタンは彼らの日常生活にとって欠かすことのできない用具なのであるが、その多くはウガンダ領のテウス (Teuth) 族やドス族から入手するということだった。'etwo' の大きなものは山羊 1 頭に相当し、交換によって手に入れるという。'etwo' 以外の日用食器や家具は、すべて木、皮革、野生植物の繊維等で作ったもの、および素焼きの土鍋で、農業生産物とは無縁であった。

7. 農業

私がトゥルカナのアイウで見かけた農具は、単純かつ素朴なつぎの 2 点にすぎなかった。

鋤の呼称 'ejembe' は、スワヒリ語の jembe に男性接頭辞 'e-' を付したものである。私が見た鋤は市販のものではなく、鉄板をハンマーなどでたたいて楕円形にし、柄をしばりつけた手製のもで、むしろスコップに近い形をしていた (写真 8)。耕作には掘り棒 'akuta' が用いられることを GULLIVER [1951] が述べているが、おそらく使い捨ての道具らしく私は見かけなかった。

もう一つの農具というのは、収穫したモロコシの風選に用いる箕 'akiekeeket' あるいは 'erite' と呼ばれるもので、私が見たものは小枝を並べて皮紐で編んだ 40cm×32cm の板状の箕で、牛糞を塗って板の隙間が埋められていた (写真 9)。

太田は、"A Classified Vocabulary of the Turkana in Northwestern Kenya" [OHTA 1989] の中で、耕作および収穫に関する用語として、斧、鎌、収穫の



写真8 トゥルカナの手製の鋤。

ためのナイフ、杵、臼等を挙げているが、いずれも専用の農具というわけではない。

このように、農具という観点から見ても、トゥルカナのそれは痕跡的と言ってよいであろう。

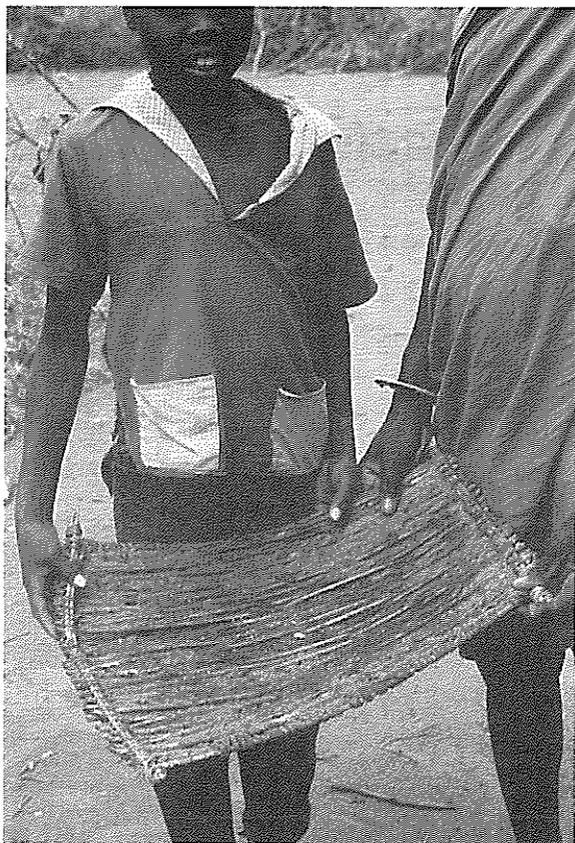


写真9 風選用の箕。

8. 農事暦

私の調査は、いずれも7～10月の間におこなわれたので、耕耘、播種、除草等の過程は見る機会がなかった。GULLIVER [1951] は、最初の耕耘は4月頃におこなわれ、7月には収穫を見るが、リスクを避けるために収穫時期をずらせていると述べている。私の聞き込みでは、雨季の始めの3月 'lomaruk' に播種し、苗が60cmくらいに伸びた5月 'titima' から6月 'eliel' に除草し、9月

'lolong' に収穫するということだった。SOPER [1985] は、モロコシは2ヵ月で収穫可能なものがあると述べているから、私の聞き込みは少し時間がかかりすぎるようにも思える。

私が実際に観察できたのは出穂前から収穫までの過程で、1978年には8月中旬はまだ出穂の初期段階であり、1982年には8月中旬に収穫が完了していた。

畑の周囲には、アカシアの枝などで嚴重な垣をめぐらすこともあるが、女や子供が監視して畜群の侵入を防ぎ、垣を設けないこともある。彼らにとって最大の問題は、出穂後に空から飛来する野鳥を駆除することだった。

夜明けから日没までの鳥追いは、収穫が完了するまでは手を抜くことのできない仕事であった。畑の中に、鳥の侵入を監視する槽 'epem' を築くこともある(写真3参照)。とくにタラッチの川辺林の中の畑は鳥害が甚しく、1 ha ほどの畑に女と子供4~5人がつきっきりで鳥を追っていた。

もっとも油断のできないのは 'asirit' と総称される黄色と黒のハタオリドリの間、'nangolengori' と呼ばれるハイガシラスズメ (*Passer griseus*)、'lokiliyo' と呼ばれるシロガシラオニハタオリ (*Dinemellia dinemelli*) など、また大集団で飛来するコウヨウチョウ (*Quelea quelea*) の侵入を許すと甚しい被害を蒙ることになる。このほか 'kuuri' と総称されるジュズカケバトの仲間 (*Streptopelia* spp.) も油断のならない害鳥だった。

女や子供たちは、ドラム缶をたたいたり、大声をあげたり、石や土くれを投げたり、畑の中を走りまわったりして鳥を追う。それでも鳥はつぎつぎに侵入する。弾力性のある長い枝の先に河床から運んできた粘土を丸めてくっつけ、力一杯粘土を投げ飛ばす 'eteteleit' (写真10)、棒の先を裂いて石を挟む投石器 'echipet' などが威力を発揮した。こうして収穫前にはつきっきりで鳥追いが続くのだが、それでも鳥による減収は無視できないと思われた。

収穫は、穂をナイフ 'ekileng' やアームナイフ 'abarait' で刈り取る。収穫の済んだ畑には、自らの畜群を入れて葉や茎を食べさせ、彼らの農作業は終わるのだが、とくに子供たちにとっては鳥追いの義務からの解放といった意味が大きいように思われた。

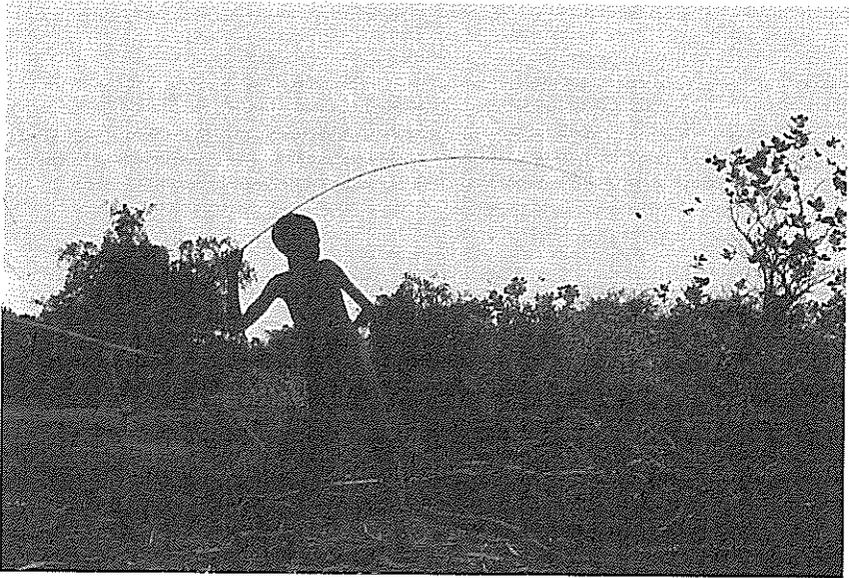


写真10 'eteteleit'で鳥を追う。

9. トゥルカナの農への執念

モロコシ栽培がトゥルカナの生業活動の中で占める位置は、牧畜を補う副次的なものにすぎないし、食生活の上でもミルクが主でモロコシが従であることは明白である。雨に恵まれずモロコシの収穫がなくても、より安定した主生業である牧畜によって生計を維持してゆくことができるのである。

既述のように、農耕は激しい移動をおこなわないアウイ・ナポロンの女性だけの副次的生業なのであるが、私は彼らの唯一の農作物であるモロコシに対する執念のようなものの片鱗を見せつけられたのである。それは、1982年の調査の終末期に、30歳代の青年男性一人と、数人の女性および子供たちからの聞き込みによって得られたモロコシの56にもものぼる品種の名称であった。この名称は、ごく短時間のうちに、つぎつぎに挙げられたのである。

調査期間の制約もあって、個々の名称についてその現物を確かめ、標本を採



写真11 トゥルカナンのモロコシ畑。一見して多くの品種が混播されていることがわかる。

集する余裕はなかった。また、それぞれについての彼らの価値評価や、名称の由来等を聞き込むこともできなかった。

以下にアルファベット順に、品種名を挙げ、その名称の意味するところを()内に列記する。()の付されていないものは意味不明のものである。

- (1) 'akejekel' (コオロギ)
- (2) 'arelekong'
- (3) 'arinyang' (黄色)
- (4) 'gomo' ('egomo' はシナノキ科の植物 *Grewia* sp.)
- (5) 'ebaakang'
- (6) 'echuchuko' ('echuchuka' はガガイモ科の植物 *Caralluma* sp.)
- (7) 'edongirot' (エチオピア南部の Nyangatom 族の別称)
- (8) 'ekedete' (引っかけるものを意味する)
- (9) 'ekorikang' (私のキリン)

- (10) 'emaler'
- (11) 'emalireit' (エチオピア南部の Marille 族の別称)
- (12) 'etorel'
- (13) 'eturkan' (トゥルカナ族)
- (14) 'ewoyareng' (赤く丈が高い)
- (15) 'kapelibok' (肌色地に別の色の模様のある)
- (16) 'kapelinyang' (黄色地に別の色の模様のある)
- (17) 'kiriminyang'
- (18) 'kiryeny'
- (19) 'lobobokile' (おいしいミルク)
- (20) 'loboko' (橙色)
- (21) 'lobokongori' (橙色に灰色の模様のある)
- (22) 'lodwarakipi' (苦い水)
- (23) 'logomo'
- (24) 'longori' (灰色)
- (25) 'loiyamugi' (紫色で丈が高い)
- (26) 'loiyangori' (灰色で丈が高い)
- (27) 'loiyokou' (頭が長い)
- (28) 'lokiryokou' (頭が黒い)
- (29) 'lokonyen' (目玉)
- (30) 'lokorimongin' (キリン模様の去勢牛)
- (31) 'lokosima' ('ekosim' は尻尾)
- (32) 'lokurono'
- (33) 'lokuru'
- (34) 'lokuryo'
- (35) 'lokwan' (白)
- (36) 'lolalakang'
- (37) 'lolele' ('elele' はカマハシ科の鳥キバシカマハシ *Rhinopomastus minor*)

- (38) 'lolenyang' ('anyang' は黄色)
- (39) 'lolingakori' (半ば模様があり半ば模様がない)
- (40) 'lomenakeng'
- (41) 'lorenikang' (丈が低い)
- (42) 'lorulamugi' (語の後半は紫)
- (43) 'loryanapang'
- (44) 'losikiria' (驢馬)
- (45) 'maina'
- (46) 'merikwan' (白黒の斑点模様)
- (47) 'nakiryokele' ('nakiryoon' は黒)
- (48) 'nakodos' (牛の丸い角型)
- (49) 'napena' ('epena' は不味)
- (50) 'napese' (娘)
- (51) 'napetabok' ('napeta' は牛の逆八の角型, 'bok' は肌色)
- (52) 'nariba'
- (53) 'naryanpan'
- (54) 'natum' (肥満した)
- (55) 'nauren' (丈が低い)
- (56) 'toorukai'

56品種中、名称の意味が明らかな39品種についてみると、22品種はその形状特性を表わしているように思われる。穂や穀粒の色または模様を表わしたと考えられるものが12例、茎の丈の高低を表わしていると考えられるものが2例、その両者を組み合わせたものが3例、穂の形状を示すと見られるものが2例、味が2例、肥満というこれも穀粒の特性を示すらしいものが1例となっている。残る17品種は比喩的な名称であるが、動物名と植物名を当てたものがそれぞれ5例と2例。部族名をとったものが3例、牛の角の型を借りたものが2例、体の部分の名称が2例、あとは引かけるもの、苦い水、娘となっている。

トゥルカナは、家畜の個体の特性を表現するための精細な分類と命名の体系

をもっていることが、太田によって明らかにされているが [OHTA 1987], モロコシの品種の類別にもそれを借用した例が見られるのは興味深い。近隣の部族名をとったものは、その品種の由来を示すものであるかもしれない。トゥルカナランドというのは、周辺の農耕諸部族からもたらされる多くの品種の吹きだまりの場と考えられ、身辺に流入したこれらの多様な品種をトゥルカナ自身もつ精細な自然認知能力 [ITANI 1980 ; OHTA 1987, 1989] によって細分し命名したのが、上掲の表だと言ってよいであろう。

トゥルカナの女性は、各自が常時好みの3～5品種の種子を播種用として備蓄しているという。このような播種用の種子は、'nyikinyamu' と呼ばれている。命名された各品種の生物学的特性の検討に基づく、彼らの分類の評価は、のちの研究結果に待ちたい。

謝辞

本調査は、京都大学アフリカ地域研究センターの太田至助教授とともにおこなった。本報のモロコシ品種のトゥルカナ名の意味解説には、太田氏の御助力を得た。厚く御礼を申しあげたい。

引用文献

FEDDERS, A. and C. SALVADORI

1977 *Turkana Pastoral Craftsmen*. A Transafrica Publication, Nairobi.

GULLIVER, P.H.

1951 *A Preliminary Survey of the Turkana: a Report Compiled for the Government of Kenya*. Cape Town University.

1955 *The Family Herds*. Routledge & Kegan Paul Ltd, London.

ITANI, J.

1980 The Turkana's view of nature. In: *A Study of Ecological Anthropology on Pastoral and Agrico-Pastoral Peoples in Northern Kenya*, J. TANAKA, (ed.), Kyoto University Primate Research Institute, Inuyama, pp.26-54.

伊谷純一郎

1980 『トゥルカナの自然誌』 雄山閣出版

1982 『大旱魃 — トゥルカナ日記』 新潮社

KURITA, K.

1982 A market on boundary: The economic activities of the Pokot and the Marakwet in Kenya. *African Study Monographs*, Suppl. Issue No.1, pp.71-103.

長島信弘

1972 『テソ民族誌——その世界観の探究——』 中央公論社

OHTA, I.

1980 Property unit and nomadic unit of the Turkana. In: *A Study of Ecological Anthropology on Pastoral and Agrico-Pastoral Peoples in Northern Kenya*, J. TANAKA (ed.), Kyoto University Primate Research Institute, Inuyama, pp.55-77.

1987 Livestock individual identification of the Turkana: The animal classification and naming in the pastoral livestock management. *African Study Monographs*, 8(1): 1-69.

1989 A classified vocabulary of the Turkana in northwestern Kenya. *African Study Monographs*, Suppl. Issue, No.10 pp.1-104.

SOPER, R.C. (ed.)

1985 *Socio-Cultural Profile of Turkana District*. Institute of African Studies, University of Nairobi and Ministry of Finance & Planning, Nairobi.

TANNO, T.

1980 A study of the ecological anthropology on the upland Pokot, western Kenya. In: *A Study of Ecological Anthropology on Pastoral and Agrico-Pastoral Peoples in Northern Kenya*, J. TANAKA (ed.), Kyoto University Primate Research Institute, Inuyama, pp.96-119.